

第182回 日文研フォーラム



# 韓日につきまとう歴史の影と その克服のための試み

Overcoming the Haunted History of  
the Korea-Japan Relationship  
A Personal Attempt



鄭 在 貞  
Chung Jae Jeong

国際日本文化研究センター



日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。

研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っているわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話が出来るように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公刊を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター

所長 片倉もとこ



● テーマ ●

# 韓日につきまとう歴史の影と その克服のための試み

Overcoming the Haunted History of  
the Korea-Japan Relationship  
A Personal Attempt

● 発表者 ●

鄭 在 貞  
Chung Jae Jeong

ソウル市立大 教授

Professor, The University of Seoul

国際日本文化研究センター 外国人研究員

Visiting Research Scholar, International Research Center for Japanese Studies



2005年7月12日 (火)

## 発表者紹介

---

鄭 在貞

CHUNG Jae Jeong

国際日本文化研究センター外国人研究員

Visiting Research Scholar, International Research Center for Japanese Studies

### 略歴

- 1974年2月 ソウル大学校師範大学歴史教育科卒業  
1982年3月 東京大学大学院文学修士号取得  
1992年2月 ソウル大学校大学院文学博士号取得  
1982年4月 ソウル大学校師範大学助手  
1983年3月 - 1994年3月 韓国放送通信大学校専任講師、助教授、副教授  
日本放送教育開発センター客員教授  
1994年3月 ソウル市立大学校人文大学国史学科教授  
東北大学東北アジア研究センター客員教授

### 著書・論文等

- 『朝鮮総督府鉄道局の雇用構造』『朝鮮近代の経済構造』日本評論社、1990年  
『朝鮮総督府の鉄道政策と物資移動』『近代朝鮮工業化の研究』日本評論社、1993年  
『新しい韓国近現代史』桐書房、1993年  
『日本の論理－転換期の歴史教育と韓国認識』ヒョヌムシャ、1998年（韓国語）  
『韓国の論理－転換期の歴史教育と日本認識』ヒョヌムシャ、1998年（韓国語）  
『韓国と日本－歴史教育の思想』すずさわ書店、1998年  
『日帝侵略と韓国鉄道、1892～1945』ソウル大学校出版部、1999年（韓国語）  
『韓国人の日本認識－その歴史的進展と課題』『東北アジア研究』5、2001年  
『(ソウル)メトロポリスへの発展』『アジア遊学』34、2001年

その他多数

## 1 転換期を迎えた韓日関係

(1) 韓国と日本はどんな関係なのか？

今年二〇〇五年は、韓国と日本が改めて国交を正常化してから四〇周年に当たる。もともと両国の政府はこの節目に際し、最近急速に深まりつつある両国民の交流と友好を更に発展させるために、今年を「韓日友情の年」と定め、大々的な記念行事と文化イベントを催す予定であった。実際に、韓日関係は過去四〇年の間、紆余曲折を辿ってきたにせよ、今は年間四百万人もの人々が往来し、七兆円の交易が行われる間柄になった。自国の対外経済関係で相手が占める地位は、世界で一あるいは三位に達するほど大きい。そればかりか、両国民の文化交流でも以前には想像もつかなかった状況が現れている。日本では、韓国のテレビドラマ「冬のソナタ」の放映をきっかけに韓国の文化（料理、テレビドラマ、映画、エステ美容、韓国語など）に対する関心が高まり、いわゆる「韓流ブーム」が勢いを見せている。韓国でも、日本の大衆文化の輸入開放を機に、日本の文化（アニメ、漫画、ゲーム、ファッション、映画、日本語など）を楽しむ人々が急増している。とくに、若者の間ではいわゆる「ニッポンフィーリング」(Nippon Feel、日本趣味)という新しい流行が生じている。

韓日関係がこのように改善の道に乗ったのには、サッカーの二〇〇二年ワールドカップの共同開催の成功を見逃すことは出来ない。歴史的に反目と対立を繰り返してきた両国民の間からは、これをきっかけに、世界的規模のイベントをとともに成功させたという達成感が感じられた。当時、「東亜日報」と「朝日新聞」の世論調査（二〇〇二年七月二〜三日）によると、相手国についてもっと親近感を感じるようになったと答えた人は、韓国五四割、日本五三割で、半年前（二〇〇一年一月）の調査よりも韓国は一三割、日本は七割増加した。また、これから韓日関係はもっとよくなると展望する人も、韓国七九割、おなじく日本七九割となり、半年前より韓国は二七割、日本は一五割増加した。ワールドカップの韓日共同開催がよかったと答えた人は、韓国四二割、日本七四割であった。これで分かるように、いまの「韓流ブーム」と「ニッポンファイル」の背景には、実は、両国が取り組んだ共同プロジェクトの成功という地ならしがあったのである。したがって、両国の政府がこの経験をふまえて今年を「韓日友情の年」と定め、国交正常化四〇年の歴史を祝い、またその延長線に、バラ色の未来を描こうとしたことも全く不思議ではない。

(2) 歴史認識の呪縛

しかし、二〇〇五年二月に入ってから事態は一変した。韓国で日本の「歴史認識」(ここでは日本の独島領有権主張、『新しい歴史教科書』の検定合格、小泉首相の靖国神社参拝などにかかわる歴史認識の全般を一括して指す)を批判するうねりが激しく巻き起こった。韓国の大統領は「外交戦争」をも辞さないという勢いで日本の歴史認識を正そうとしたが、日本政府がかたくなな姿勢で反論を繰り返して、韓国と日本の政治外交関係は「韓日友情の年」どころか溝が深まり、険しい状態がいまだに続いている。

そのせいか、「韓国日報」と「読売新聞」の共同世論調査(二〇〇五年六月一〇日)によると、韓国人の対日不信感は一〇%にはねあがり、日本人の対韓不信感は三五%に達した。また、過去一〇年間、両国民の相互理解は深まったのかという問いに対して、肯定の答は、日本人は五二・六%から五二・八%へわずかに増加した反面、韓国人のそれは四五・八%から二七・九%へ大きく減少した。一方、私も出演したNHKのBS討論番組(二〇〇五年六月一九日夜の放送「日韓の課題 いま語りたい」)にネットで投稿した日本人の世論は、韓国に対する不信感がほぼ一〇〇%であった。そればかりでなく、彼らの中には嫌韓のあげく「国交を断絶すべし」という主張も少なくなかった。韓国人が憂慮しながら見守ってきた二〇〇五年十月の小泉首相の靖国神社参拝は韓日の歴

史認識の溝をもっと広げるにちがいない。

以上で見たように、いま韓国と日本の関係は友好と対立の分かれ道でさまよう転換期を迎えているのである。

## 2 韓日の歴史認識と歴史教科書

(1) なぜ歴史認識なのか？

そもそも、近代以来の国民国家は国家に帰属する意識を持つ国民によって支えられている。国家に対する共同体意識は今日でも我々の日常生活と国際交流に様々な影響を与える要素である。だからこそ、たいいていの国家は国民意識の形成のために「我々の物語」としての歴史説話を教え込み、また様々な方法で国民としてふさわしい歴史認識を育てようとする。

歴史教育と歴史教科書は国民の歴史認識を育むのに有効な手段である。しかし、それが隣国あるいは他国を無視して極端な自国家中心主義とか自民族中心主義に傾くと、国粹主義あるいは排他主義に走りやすい。それが結局国家・民族間の戦争と虐殺につながったことは過去二〇〇年の世界の歴史が証明する。

韓国と日本の間にも歪められた歴史認識が不幸な結果を招いた経緯があり、今もその名残が懸案として尾を引いている。すなわち、国交正常化四〇周年を迎えたにもかかわらず、韓国と日本が歴史認識を巡って激しいやりとりを交わす事態を見ると、両国は未だ歴史の呪縛から解かれていない事がはっきりと分かる。韓国の場合は、侵略と支配に対する日本の歴史認識が戦前のそれから完全に脱皮していないと疑う反面、日本は過去の不幸な出来事についての反省と謝罪は、不十分かもしれないが、もう終わったとの立場である。

歴史問題に対する両国民の態度の隔たりをよく表す統計がある。ワールドカップの前、ソウル大学校と東京大学の新聞が両校の学生を対象に行った世論調査（二〇〇二年五月二七日）では、韓日関係の改善のために最も重要な仕事として、ソウル大生の七三・二割は「歴史問題の清算」を、東大生の六〇・七割は「経済文化の交流」を最も多く挙げた。また、日本の首相の靖国神社参拝について、ソウル大生の七二・八割、東大生の一六・三割が反対の意見を出した。これを通じても、韓国人は歴史問題にけじめをつけることを望み、日本人は現実的交流の利益を重んじることがよく分かる。だから、歴史問題に対する両国民の意識の偏差を埋めなければ、高まりつつある相互友好親善の雰囲気はいずれ覆されてしまう危険性がある事が窺える。実際に、今年の韓国と日本の

確執と葛藤は、歴史問題というマイナスシンボルが、「韓流ブーム」と「ニッポンフィール」というプラスシンボルを吹き飛ばす結果となったよい例であろう。

ふりかえてみれば、今年、日本が大韓帝国を植民地化するきっかけを作った第二次韓日協約の締結から一〇〇周年、韓国が日本の植民地支配より解放され独立したことから六〇周年、という別の意味での重要な節目でもある。韓国政府はこの節目に当たり、国内で近現代史が残した負の遺産を整理する政策を次々と打ち出してきた。だから歴史の専門家たちはいずれ韓日のあいだでも歴史問題をめぐる葛藤が大きく浮上するだろうことは早くから予測していた。実際、私も両国の政府がバラ色の幻を追っていることを控えめに見守りながら、いつそれが破綻するのか心配していた。

では、韓国と日本のあいだにはなぜ歴史の影が色濃くつきまとうのか？その根本的な原因は、日本の歴史認識とくに韓国と関わりのある歴史に対する日本の認識が戦前に形成された「植民地史観」、または「皇国史観」から完全に抜け出さなかった部分があり、韓国が事あるたびにそれをしつこく追及して、お互いの対立と緊張が収まらないからである。ここではその全貌を明らかにする余裕がないので、とりあえず韓国側の言い分に沿って話を進めていきながら、ところどころで日本との比較につとめたいと思う。特に話題の中心を日本の歴史教科書と歴史教育に置きたい。韓国人は、日本人の歴史認識が歴

史教科書によく反映され、またそれを用いる歴史教育を通じて育まれていると思うからである。

ここで一つ断っておきたいことは、韓国人が日本人の歴史認識に関心を寄せるのは、たんに不幸な韓日関係に由来する警戒心のためだけではないという点である。韓国人は、国際化・情報化が急速に進み、他国家・他民族・他地域との共存共栄と相互協調がさらに切実に求められる今の時代に、果たしてどのような歴史認識をもって他の国とつきあえばよいのかについて迷っている。原論的にいえば、現代の歴史認識は民衆レベルの国際理解を深めるのに役立たねばならない。しかし、現実的に表れている各国の歴史認識は、程度の差こそあれ、自国中心主義的であり、ナシヨナリズム的な傾向を抱えている。このような歴史認識は国家・民族・地域の相互間の摩擦と対立をあいり、国際理解にマイナスに作用する場合も少なくない。貿易額が国民総生産の70%に達する韓国は今や自国中心主義とかナシヨナリズムだけでは通じない国柄になっている。しかしながら、南北に分断された民族と国土を統一するためにはナシヨナリズムをある程度強調しなければならぬ。このような苦悩の中で、かつて極端なナシヨナリズムを標榜した経験を持ちながら、いまは民主化・多様化・国際化の方向へ進んでいく日本の歴史認識は、韓国にとって「他山の石」でもあるのである。だから、韓国は日本の歴史教育と歴史教科

書を批判するだけでなく、実際はそれから学ぶことも多いのである。

(2) 日本の歴史教科書の特徴

戦後日本の歴史教育と歴史教科書は「皇国史観」を払拭し、市民の民主的資質を養うのに大きく貢献した。ここでは、現代の日本人の歴史認識の方向を導くのに重要な役割を果たした歴史教科書の特徴について述べたい。それにはさまざまな側面があるが、とりあえず次のいくつかを挙げるができるであろう。

第一に、自国史と世界史の二つの種類に分かれていること。中学校の歴史教科書は日本史を中心にして、それに関連する世界史が入り込んだ形になっているが、高等学校の歴史教科書は日本史と世界史が全く別々である。この点は日本を含む東アジア地域（中国・韓国・台湾・北朝鮮）に共通する特徴であるといえる。お互いの国同士で人間と物資の交流が非常に頻繁であるにもかかわらず、この地域がいまだにナシヨナリズムが強いのは、自国史と世界史の分離教育に多少でも影響を受けているのではないかと私は思うが、それが正しいか否かはもつと調べてみる必要があるだろう。

第二に、小学校・中学校・高等学校の各段階で、内容の詳しさと深さはそれぞれ違っても、原始時代から現代までの歴史を繰り返し教えるように書いていること。いわ

ゆる通史を丹念に教え込む形なのである。この点では韓国が日本よりもっと徹底しているかもしれない。これは両国とも一見歴史教育を重んじているように見える。が、同じ事を繰り返して教わる生徒は歴史の学習に飽きて興味を失うことになるだろう。

第三に、教科書が文部科学省の強力な行政指導のもとに編纂されること。日本の教科書は学習指導要領にしたがって書かれるし、その取り扱いは検定を通じて几帳面にチェックされる。文部科学省は、教科書の内容はもちろん、定価と分量などの範囲までも提示する。先進諸国の中で、政府が教科書に日本のように強く介入する国はない。教育部が自国史の教科書を編纂する形をとっている韓国の方も同様であるが、両国の事情に詳しい私から見れば日本の方がもっと厳しい一面もあるように思われる。しかし韓日のどちらがより巧みに規制を行なっているのかについてはもう少し検討してみるべき余地がある。

第四に、世界史の教科書は世界の各地域を比較的バランスよく扱っている。しかし、書き方の中心は西ヨーロッパ史であり、東北アジアについては中国、特に漢民族の歴史が柱になっている。ほかの国と民族に対する叙述はばらばらで断片的である。韓国の歴史とか韓日関係の歴史については、その実態と重要性に比べて、分量が少ないし、内容も短絡的である。歴史教育が近隣諸国との理解を深める方向へ向かっている最近の事情

を考えれば、韓国史と韓日関係史の分量と書き方にもっと配慮すべき点がある。

第五に、高校の世界史教科書には、自国史がほとんど含まれていない。同じく日本史教科書には世界史が含まれていない。教科書上で日本史と世界史は互いに孤立して書かれているのである。これでは自国史と世界史を関連させて理解するのには妨げとなる。また自国史を世界史からはなれた特殊な歴史として受け止める可能性もある。中学の歴史教科書でさえも自国史と世界史が分離されている韓国の場合は、その被害はさらに深刻であろう。

第六に、日本史の教科書は縄文時代・弥生時代・奈良時代・平安時代・鎌倉時代など、むかし日本でつかわれた道具や権力の基盤がおかれた地名になぞらえた時代区分や歴史用語を頻繁に使用している。これは自国史の流れと個性を独自の概念で理解するには有効であるが、自国史を世界史の中で他国史と比較して把握するのには不便である。この背景には日本史を特殊史ないし固有史として位置づけようとする意図が潜んでいるのかもしれない。が、日本史を世界史との関連で理解するのに適当であるとはいえない。この点だけを見ると、ナシヨナリズムの性格が強いといわれる韓国の自国史教科書よりも、日本の日本史教科書がさらに自国中心主義的であるといえよう。

(3) 改善しつつあった日本の歴史教科書の韓日関係史記述

以上のような特徴を持っている日本の歴史教科書は、韓国の歴史に関連する部分をどう取り扱っているのか？その特徴については前節ですこしふれたことであるが、ここでは最近一〇年あまりの間に、その記述の方法と内容がどのように変化してきたのかを概観してみたい。

まず挙げられることは、韓国の歴史に関連する記述の分量と内容がたいへん粗略である。三五〇〜三八〇頁ほどの高校の歴史教科書の中で、韓国史に関わる内容は二・八割（日本史教科書では四・五割、世界史教科書では一・三割）にすぎない。これは南北の韓国・朝鮮に関する内容を合わせての分量である。中学の教科書も同様である。これは、日本の歴史教育が韓国史の取り扱いを軽視していることを端的に示すよい証拠だといえよう。

韓国の歴史についてあまり教わっていない日本の生徒は、当然韓国の歴史に関する知識が乏しいし関心も低い。彼らは韓国の歴史は言うまでもなく、韓日関係史についてあまり知らない。逆に韓国の学生は韓日関係史、特に近代の韓日関係史に関して詳しい。だから、日本と韓国の学生は韓日関係史に対する知識の量とその見方に大きな隔たりがある。

ところで、日本の歴史教科書の韓国史に関連する内容の記述は、一九九四年以降ずいぶん変わってきた。それ以前にも文部省の部分検定を受けるたびにその内容が少しずつ変わってはきたが、それは基本的に一九七八年に施行された学習指導要領の枠内で起こった変化にすぎなかった（以下、この時期の歴史教科書を旧教科書と呼ぶことにする）。一九八二年に東アジア諸国に波紋を広めたいわゆる日本の歴史教科書の「歪曲事件」は、この学習指導要領による検定から起こったものであった。一九九四年以降の歴史教科書は、一九八九年に、改訂・告示された学習指導要領に基づく検定を受けた。これ以後文部省は「近隣諸国に対する配慮」の次元で検定を緩和したために、教科書の執筆者と出版社は日本のアジア侵略と植民地支配に関する内容を、ある程度自由に記述することができた。（以下、この時期の歴史教科書を新教科書と呼ぶ。ただ、断っておきたいことは、新教科書には二〇〇二年以後いまままで使われている中学校の歴史教科書は含まれていないことである。この教科書は二〇〇〇年の学習指導要領の改訂によって教科書の分量が三分の一くらい減らされ、韓国史関連部分もずいぶん少なくなった。これについては稿を改めて検討する必要がある）

それでは、日本の新教科書では韓国史に関する記述が、旧教科書と比べてどのような変化したのか。一九八二年の歴史教科書の「歪曲事件」以来、韓日の間で議論の的にな

ってきた、日本の韓国に対する侵略と支配に関する記述を中心にして概観してみよう。

第一に、出版社別に程度の差こそあれ、新教科書は日本の韓国侵略と植民地支配に関する記述の分量を、旧教科書より一〜二頁増やした。そして大部分の新教科書が「義兵運動」、「皇国臣民化政策」、「強制動員（徴兵・徴用・従軍慰安婦など）」、「韓国人の抗日運動」などの項目を新たに追加し、少し詳しく説明するようになった。特に一九九四年から高校、そして一九九六年からは中学の新教科書のほとんどすべてにおいて、「従軍慰安婦」に関する記述が見られるようになったのは、注目すべき傾向であった。「自由主義史観」を標榜する右寄りのナショナリストが、新教科書に対して攻勢を強めたのはこのことが一つの原因であった。その成果もあって、二〇〇二年以後の中学校の歴史教科書では「従軍慰安婦」に関する記述がほぼ消えてしまった。

第二に、新教科書では現在でも韓日間で懸案になっている事項を、歴史的な観点から記述する場合が多くなった。例えば、戦後補償の問題と関連して強制連行と原爆被害者問題を取り扱うとか、人権運動と関連して在日韓国人・朝鮮人の差別問題を記述したりしている。こうしたやり方は、歴史学習の究極的な目的が、当面する課題を記述したりに役立つ歴史能力を養うことにあることを考慮すれば、望ましい試みであるといえる。

第三に、新教科書は韓・日の連帯の事実を掘り出し、紹介しようとしている。いくつ

かの新教科書では、たとえ人の数は少なく、またその試みが消極的であったとしても、日本の韓国に対する侵略と支配に批判的であった石川啄木、柳宗悦、石橋湛山などの思想と行動を紹介した。これは歴史を学ぶ世代が勇氣と希望を持って、韓日関係の改善に力を尽くすことを期待する布石であるともいえる。このような新鮮な書き方は韓国の歴史教科書の執筆にも影響を与え、同じ日本人の話が韓国の歴史教科書にも載るようになった。教科書の国際改善運動の視点から見れば、これは非常にいい事例になるに違いない。ただ、韓国に対する侵略と支配をむしろ「近代化を助けた」と主張する「自由主義史観」（『新しい歴史教科書』）が横行する今日の日本で、きわめて微々たる日本人の消極的な人道的思想と行動を浮き立たせるのが、かえって日本帝国主義に免罪符を与える結果を招くのではないかという懸念が、韓国にないわけではない。

以上で見たように、近現代の韓日関係史に関する記述において、新教科書は旧教科書より分量的にも内容的にも改善されたといえよう。その原因としては、日本政府が一九八二年の歴史教科書の「歪曲事件」以降、教科書検定において「近隣諸国に対する配慮」の姿勢を取ってきたこと、執筆者と出版社が「家永教科書裁判」の支援運動などを通じて、お互いに連携しながら、教科書改善に尽力してきた事などを挙げることができる。またもうひとつの要因として、日本・韓国の歴史研究者、歴史教育者、歴史教科書執筆

者などが活発に交流しながら、教科書改善と相互理解の幅を広めてきたことを忘れてはいけない。

幾つかのアンケート調査結果をみると、日本の歴史教科書の韓国史に関する記述の改善は日本の学生の韓国認識をいい方向に変えるのに役に立った。彼らの韓国史観には優越感と差別意識がすこし潜んでいるが、今の韓国についてはむしろ実態よりやや高めにみる面もある。韓国人は民族意識・団結心・主体性・文化の水準と創造性は強い（高い）が、外来文化の摂取能力・侵略性・経済観念は低い（弱い）と思う。代わりに北朝鮮に対する見方は厳しい。日本の学生は植民地支配に対する反省と償いなどは不十分ながら済ませていると思う。また、彼らは韓国との友好協力関係を希望するが、歴史認識を話題にすることについては抵抗感を感じる。

ところで、改善しつつあった日本の歴史教科書の韓日関係史記述が、最近逆戻りする傾向を見せている点を特別に指摘しなければならぬ。二〇〇二年から使われるようになった中学校の歴史教科書は、授業時間の減少によって教科書の分量そのものがずいぶん減らされた。そのせいもあってか、従来増え続けていた韓日関係史の記述量は格段に少なくなつた。真つ先に削られたからである。その上もっと深刻なのは、後述するように、『新しい歴史教科書』の出現に刺激されて、その記述の内容も日本ナショナリズム

に傾く方向へ転じたことである。これがまた近いうちに韓日間の歴史認識の溝を広める可能性があると思われる。この問題についてはこれからもっと詳しく検討してみる必要がある。

(4) ずいぶん変わった韓国の歴史教科書

従来、韓国の歴史教育と歴史教科書には、近代での日本による侵略と支配、解放後の民族と国土の分断などの不幸な歴史を克服するための苦悩が濃い影を落としていた。そのため、歴史教育と歴史教科書は、愛国心と民族的アイデンティティをおおる、自国史の主体的・内在的發展を強調する、前近代での文化の高い水準を誇る、近代での民族独立運動に光を当てる、現代での民主主義と国際理解を標榜する、対外関係では韓米日関係に比重を置く、などの特徴を持っていた。それが、見方によっては、韓国の歴史教育と歴史教科書がナシヨナリズムだらけであり、また「反日的」であると批判される面もあった。

末尾の参考文献に挙げたアンケート調査結果によると、このような歴史教科書で教わった韓国の学生の日本認識は厳しい。彼らは日本の歴史に対して断片的知識しか持っていない。特に韓国と関連のある部分のみを以て日本を見る傾向が強い。韓国の学生は、日

本が前近代では韓国から文化を学び、近代では韓国を侵略・支配した、つまり恩を仇で返したと見る。彼らは、日本の歴史では倭（古代）、倭寇（中世・近世）、倭軍（近世の豊臣秀吉軍）、皇軍（近代）、自衛隊（現代）が連続性をもって受け継がれているとイメージする。かわりに、現代の韓日関係に関する知識はほとんどない。その結果、彼らは日本の力量を軽視し、いまでも大日本帝国の名残が温存しているとみる。天皇制・日の丸・君が代・政治家の「妄言」などからの連想である。彼らは、歴史的にみて日本は民族意識・団結心・侵略性・経済観念・主体性・外来文化の摂取などの能力は強い（高い）が、文化の水準と創造性などは低い（弱い）と思う。しかし、韓国の学生は日本に対する不信感を持ちながらも、両国が友好協力関係を構築することを強く希望する。

ところで、韓国でも、一九九〇年代後半以後の教育改革、すなわち第七次教育課程の施行により、歴史教育に大きな変化が生じている。歴史教育は、国民共通基本教育課程である初等学校から高等学校一年まで段階別に深化させるように組み立てられている。初等学校では生活史と人物史を通して歴史感覚を身に付けさせ、中学校では政治史中心の通史を学んだ後、高等学校では政治史・経済史・社会史・文化史に分けられた分類史を勉強するような形である。

第七次教育課程に基づいて作られた中学校「国史」教科書の変化は次のようである。

第一に、授業時間が従来の分より一時間減らされ、教科書も上下二冊（併せて四三〇余ページ）から一冊（三六〇余ページ）に縮小された。その代わりに改訂された教科書には参考資料とか図版などが多く組み入れられた。

第二に、内容の取り扱いが探求型、すなわちまず生徒の興味を誘い、みずから学習に取り組んでいくような形を取っている。そのために、「読みとり資料」、「深化課程」などの項目が新しく設けられた。

第三に、版型が大きくなり、多色刷りで刊行した。従来の教科書が白黒の単色であったのにくらべ、新教科書は外観だけを見ればずいぶん豪華なものになったといえよう。

高等学校一年で学ぶように編纂された「国史」教科書の変わりぶりも中学校の「国史」のそれと大体似ている。ただ、内容の構成が、先に触れたように、分類史形式をとっている。

ところでこの教科書は編纂に当たって、意外な批判にさらされた結果、もともとの編成と内容に修正が加えられた。高校一年生の「国史」は原則として、近代以前まで取り扱うことだった。第七次教育課程は、近現代史教育を強化するという主旨で、高等学校の深化選択課程として「韓国近現代史」を設け、別の教科書をもって学習するようにしたからである。しかし「韓国近現代史」は選択科目なので、これを選択しない学生は自

国の近現代史を学ばずに高等学校を卒業する恐れがある、という批判の世論が巻き起こった。政府は早々と補完策として、「国史」教科書に近現代史の概要を付け加えることにした。これではせつかく設けた「韓国近現代史」と内容が重複するはめになるしかなかった。

韓国の歴史教育ないし歴史教科書の変化の中でもっとも重要なのは、いままで「国史」教科書が「一種教科書」（いわゆる国定教科書）として編纂されてきた制度が、一部にせよ、崩れたことである。高等学校二〜三年で学ぶ「韓国近現代史」は日本とほぼ同じ形で検認定制度を取り入れたのである。

振り返ってみると、韓国でも「一種教科書」に対する批判の世論は以前から高かった。その論拠はおおむね次のようであった。

第一、歴史教育が政権維持の理念的道具として利用しやすくなる。

第二、生徒に画一的な歴史内容を提供するおそれがある。

第三、「国史」教科書を聖典視または絶対視するようにして試験のための準備書に転落させる心配がある。

第四、すべての事実を「当」「否」という白黒論理で理解させるおそれがある。

第五、学問的研究成果の受容を遅らせるおそれがある。

第六、創意ある叙述を事実上不可能にする。

実際に、以上のような理由で著名な研究者が執筆を忌避する場合もあった。

政府はこのような世論を踏まえて「韓国近現代史」を思い切って検認定制度へ持つていった。が、それを実行していく過程で思わぬ批判にぶつかって苦労しなければならなかった。教育人的資源部の検定に合格した教科書が現政権（当時は金大中政権）の業績をあまりにも美化し、一方で前政権の事績は相対的に低く評価しているのではないかという事であった。いわゆる衡平性の喪失と政府の圧力を問題にしたのである。

「韓国近現代史」教科書が最近（二〇〇四年）もう一度批判にさらされたのは、金日成の抗日武装闘争を大きく記述し、また北朝鮮の歴史についての否定的な部分は殆ど言及しなかったのに対して、李承晩の独立運動は無視しながら、現代の韓国の歴史は暗い部分だけを浮き彫りにした、ということであった。事実の選択と取り扱いの公平、すなわち均衡感覚が問われたのである。

「韓国近現代史」教科書をめぐるとこのようなやりとりには、どの国の歴史教育でも、いつ起きてもおかしくない普遍的な問題が潜んでいる。すなわち教育と権力の関係をどのように設定するか、事実の選択と内容の記述で公正性と公平性をどのように確保するか、国家イデオロギーと歴史記述の緊張関係にどのように対処するか、等々の問題を端

的に表したと言える。長期的に見れば、歴史教科書とその検定をめぐる韓国内部での葛藤は、これからの教科書制度の発展と教科書内容の充実に大きく寄与するだろう。また韓国が、程度の差はあるものの、韓国と似ている経験をすでに辿ってきた日本と歴史対話を推し進めるのに有効な材料になるにちがいない。

### 3 『新しい歴史教科書』の登場と韓日の歴史葛藤

(1) 後戻りした『新しい歴史教科書』の韓日関係史叙述

最近、韓国ではまた日本の歴史教科書が世間の注目を浴びている。歴史教育に関心のある教育者とか研究者ばかりでなく、大統領と外務長官までも日本の歴史教科書を政治外交問題にする。「新しい歴史教科書をつくる会」という団体がつくった中学生用の『新しい歴史教科書』が、文部科学省の検定を通過し、二〇〇二年から極めて少数ではあるが学校教育で正式に使用されるようになったからである。

では、なぜ韓国では、『新しい歴史教科書』を問題にするのか？韓国人はこの教科書の登場が戦前の「植民地史観」あるいは「皇国史観」の「新しい復活」ないし「新しい変形」であると受け止めている。韓国の世論は『新しい歴史教科書』が韓日関係史を次

のような視点から記述している、という。

第一に、日本は古代に、韓半島に勢力を伸ばし、その南部を支配した。検定合格本では「任那日本府」などの設置を露骨に主張する表現はなくなったが、「任那」などの用語を用いて、勢力の基盤を維持したというニュアンスを強く窺わせる。戦前は「任那日本府」を「朝鮮総督府」になぞらえて、韓国に対する侵略と支配を合理化するのに利用した。

第二に、歴史的に見て、韓国は中国に服属した非自主的な国家だったのに比べて、日本は中華秩序から抜け出した自主的独立国家だった。前近代のアジアでは中国を中心に、いわゆる朝貢冊封体制が外交秩序として機能していた。その強度は北京からの距離によって左右されがちであった。北京にすぐ近く陸接している朝鮮が、海によって隔離されている日本より中国の圧力を強く受けたことにはある意味では当たり前である。この教科書は、朝貢冊封に関わる韓国と日本の歴史を、国の主体性・独立性の強弱の観点から、頻りに比較してみせる。戦前の「植民地史観」も韓国史の「他律性」と「事大性」を強調し、韓国人の独立精神を抑圧したことがある。

第三に、歴史的に見ると、日本は国内外の情勢に鋭敏に対処して近代化に成功したが、韓国はそれができなくて近代化に失敗した。これは一面の事実ではあるが、この観点か

らは日本自らが韓国の素早い対応と近代化への動きを踏みにじったという事実がみえない。日本が如何に優れていたのかだけを強調する。

第四に、地政学的に見て、韓半島は日本の安全を脅かす凶器であるため、日本の安全を守るためには列強に先んじてこれを押さえなければならぬ。検定の過程でさすがに「凶器」という用語は消えたが、その主旨は合格本にそのまま生かしている。これは戦前から日清戦争と日露戦争を正当化し、また韓国に対する侵略と支配を合理化する論理として力を振ってきた。この視点からは過去の侵略と支配に対する反省と謝罪の意志または姿勢が出てこない。

第五に、韓日関係史上の出来事で日本はたいへい正しく、韓国は間違いを犯したので、両国間で発生したかんばしくないものの責任は韓国側にある。この教科書は、韓国と日本とのあいだの摩擦と対立、侵略と支配の原因を韓国側に被せる書き方をしている。まさに自国史中心主義の典型である。戦前の「植民地史観」もたいへいそうであった。

第六に、日本は韓国の近代化に努めたが、韓国がこれを受け入れず、やむを得ず韓国を「併合」して開発に乗り出した。帝国主義が侵略と支配をするとき、収奪と開発は銅銭の両面のように付きそうものである。収奪をするために開発もする。終始、朝鮮の直接支配を貫徹した日本帝国主義はなおさらである。この教科書は収奪の面には目をつぶ

り、開発の面にのみ焦点を当てている。

『新しい歴史教科書』の見方に対して、韓国人は、日本の偉大さと光栄を強調するために韓国史がけなされてもよいのか、という怒りを感じる。また、戦前の歴史認識の復活が、忘れようとする過去の不幸な傷跡をほじくり返す挑発ではないか、と憂慮する。もっと残念なことは、戦後六〇年のあいだに、日本が成し遂げた民主主義的歴史研究と歴史教育が果たして何だったのか、という疑念を抱くことである。

## (2) 歴史認識をめぐる葛藤の再燃

一九九〇年代半ば以来、韓国の世論は日本が「日の丸」「君が代」を国旗・国歌として法制化し、「自由主義史観」を標榜する歴史研究者・歴史教育者・文化人・政治家などが、日本的ナショナリズムを高揚するために歴史修正キャンペーンを大々的に展開する動きに対し、戦前の「皇国史観」にも似たような歴史認識が再び堂々と打ち出されるのではないかと、敏感に反応し、警戒心を抱いた。それは二〇〇〇年以後日本が有事立法などを一気に成し遂げ、イラクに派兵する事態を見て一層強まった。

もともと韓国人は日本の皇国史観的歴史認識が、たんなる歴史研究・歴史教育の次元にとどまるのではなく、日本の韓国にたいする侵略と支配を合理化・正当化するイデオ

ロギーとして機能してきたことを体験を通じてよく分かっていた。ただ最近になって、日本の事情に明るい一部の研究者によつて、日本の歴史教科書が一九八二年の歴史教科書「歪曲事件」を契機にして、「近隣諸国に対する配慮」という文部省の方針のもとに、漸進的な改善の道を歩んできたという事実が紹介され、少しは日本に対する警戒心を緩めた。ちょうどこのとき、金大中政府は日本の大衆文化の輸入開放などの「対日太陽政策」を推し進め、韓日関係が相互理解の方向に好転する兆しが見えた。したがって、多くの韓国人は、日本人が皇国史観的韓国史観から抜け出して、真の友好親善が可能になるだろうと期待するようになった。韓国人が、ようやく日本に対してこのように好感の念を抱くようになったとたんに、「新しい歴史教科書をつくる会」が日本的ナショナリズムを極端に高揚させる『新しい歴史教科書』を編纂した。そして、これが文部科学省の検定に合格し、ごく一部ではあるが、学校教育でも公的に教えられるようになった。これは韓国と日本の間で歴史認識をめぐる芽生え始まった相互理解の芽をつみ取るべきことにほかならなかった。

国民の世論に押された韓国政府は日本政府に強く抗議し、また三五項目に達する修正要求書を渡した。韓国の強硬な出方に驚いた日本政府は、小渕総理大臣と韓国の金大中大統領とが交わした「パートナーシップ宣言」（一九九八年一〇月）の歴史認識、すな

わち、「植民地支配によって、多大な損害をもたらしたことに對する痛切な反省と心からの謝罪」に変わりは無い、と繰り返して弁明した。また、『新しい歴史教科書』は民間人が書いたもので、思想と学問の自由を保障する憲法の下では、政府があつた教科書の歴史観を規制することはできないといつて、むしろ韓国側に日本の教科書編纂制度への理解を求めた。

『新しい歴史教科書』を巡る韓国と日本の一年あまりのもみ合いは、両国の政府が支援する「韓日歴史共同研究委員会」の設置を合意することによつて、一応幕を閉じた。私も参加した同委員会は紆余曲折を辿りながら三年間の活動を終えて、二〇〇五年六月に膨大な研究成果を公開した。しかし、その功もむなしく、韓国と日本のあいだではまた歴史認識を巡つて熱戦が再発した。両国は首脳会談まで開きながら激しい攻防戦をくり広げたが、歴史認識の溝は埋められず、「韓日歴史共同研究委員会」の活動を再開することに合意して、事態の収拾をはかつた。

歴史認識を巡る今度の葛藤は、冒頭でふれたように韓国と日本の国民に深い亀裂を生み出した。韓国人のなかでは日本の皇国史観的韓国史観の蘇りに對する警戒感を抱く人々が急激に増えた。一方、日本国民のなかでは、歴史認識に對する韓国のしつこい攻勢に、「もういやだ」「いつまで謝るの」「いい加減にしろ」など、反発する雰囲気が高

まっている。一つ幸いなことは、歴史認識を巡る激しいやりとりも、さすがに両国の「韓流ブーム」と「ニッポンファイル」を封じる込めることまではできなかったことである。韓国と日本の民間レベルの交流はもう歴史認識と政治外交に左右されないほど進展しているのである。

#### 4 韓日の歴史対話と相互理解

(1) なぜ歴史対話なのか？

韓国と日本のあいだで生じる歴史認識の葛藤を癒すためにはどうすればいいのか？ 一見、両国の政府がこれを外交問題として取り上げ、一挙に解決すればよいと考えがちだが、それはあまり容易でも効率的でもない。さまざま歴史観を持っている国民を抱えている両国の政府としては、国益保護を楯に自分に都合のいいこと以外にはいいにくい。だから、韓日両国政府は四〇年前に国交正常化の協定を結ぶ時でさえも、歴史認識については合意に達することができなかった。日本政府が韓国の植民地支配について文書で反省と謝罪の意思を表明したのは、なんと戦後五〇年以上たった一九九八年一〇月のパートナーシップ宣言であった。

しかし、その後も日本の首相は毎年靖国神社に参拝し、一部の閣僚は植民地支配を合理化する「妄言」を繰り返した。その上、『新しい歴史教科書』が文部科学省の検定に合格し、学校教育で使われるようになった。これらの出来事の渦中で両国の政府は歴史認識を巡っているんなやりとりを交わしたが、その溝はあまり縮まらないで、むしろ両国民の反日・反韓感情をおおる結果になったこともあった。政治家は常に国内の世論の動向を見極めながら、自分の権力基盤を固めたいと思うため、ナシヨナリズムをそそのかす傾向を持っているからである。従って、歴史認識を巡る葛藤を癒す方法として、両国の政府が前面にたって直接外交戦を繰り返すことは、必ずしも望ましい方法ではないともいえる。

韓国と日本の歴史認識の溝を埋めるには、むしろ民間レベルでの歴史対話を広めていくほうが有効かもしれない。両国は現実でも未来でも深い関係を持ちながら共存共栄して行くしかない間柄である。そのためには両国民の相互理解と友好協力が大切である。歴史認識を巡る対話はまさにその土台をつくる核心的な作業の一つではないかと思われる。韓国と日本は自由民主主義と市場経済システムを標榜し、人権・平和などで価値観を共有する面が多い。学問と言論の自由もほぼ完全に保障されている。だから、歴史を話題にする自由な対話がいくらでも可能だ。ただ、歴史対話では歴史研究そのものも重

要だが、やはり歴史教育と歴史教科書の問題を議論しあうことがより効果的であろう。どの国でも両者は国民の歴史認識を育むのに直接影響を与えるからである。

## (2) 歴史対話の経過

一般人はあまり気がつかないだろうが、韓国と日本の間では、もう二〇年以上の歴史対話の歴史が存在する。ヨーロッパで歴史教科書を巡って国際対話が始まったのは第一次世界大戦直後までさかのぼるが、ドイツとポーランドなどが本格的な対話を始めたのが一九七二年であることを考慮すれば、韓日の対話の歴史も決して短いとはいえない。

韓国の歴史研究者と歴史教育者は一九七六年、日本の歴史研究者と歴史教育者を招いて歴史対話を始めた。この年は韓国と日本が朝日修好通商条約（一八七六年）を結んだ百周年に当たり、韓国ではその歴史の意味を再検討する学術会議が開かれた。韓日の歴史対話はその一環であった。

以後、韓日の歴史対話は一〇年ぐらい停滞したが、一九八二年に日本で歴史教科書「歪曲事件」が起こったことをきっかけに再開されるようになった。私はこのとき以来、韓国と日本のいろいろな歴史対話のほぼ全てに参加するようになった。初期の頃の対話では韓日合同の歴史教科書研究会の活動が目立った。このとき議論の的になったのはおも

に日本の歴史教科書であった。歴史対話の様子はその都度韓国と日本でマスコミと書物を通じて一般にも知られ、少なからぬ反響を呼んだ。

一九九〇年代半ばに入ってから歴史対話に大きな変化がみられた。対話に参加する人々が研究者と教育者から学生にまで広がり、議論の対象も日本の歴史教科書ばかりでなく韓国の歴史教科書まで及んだ。教師同士は自分の授業を事例として報告し議論し合った。歴史に関わるいろんな学会と団体はシンポジウムを開いたり共同研究を設けたりした。韓国では歴史教育研究会、日本では比較史・比較歴史教育研究会が重要な会議をたびたび開いた。両国の歴史研究と歴史教科書を相互に関連させて徹底的に検討したのは、私もそのメンバーであったソウル市立大学の歴史教科書研究会と東京学芸大学の歴史教育研究会であった。それ以外に、学生の修学旅行や一般人の歴史観光を通じても相互理解を広めた。

韓国と日本の歴史対話は二〇〇二年の『新しい歴史教科書』の登場を前後にしてもう一度新段階を迎える。両国の主な歴史研究団体と市民運動団体がそれぞれ連繋しながらこの教科書に対する批判と反対の運動を展開するなど、歴史対話は堰をきったように活発になり、トピックの幅が広がったのは勿論のこと、議論の水準も飛躍的に高まった。一例として、両国の主な歴史研究団体は、二〇〇一年十二月から二〇〇五年二月にかけ

て東京とソウルで三回の合同シンポジウムを開催した。ここでは韓国と日本の歴史研究、歴史教科書、歴史教育などの現状と展望についてさまざまな意見が交わされた。このシンポジウムに参加した人々は『新しい歴史教科書』の登場とそれによって惹き起こされた韓日間の葛藤を深刻に受け止め、学問的対応を通じて歴史認識の相互理解を広げようと試みた。

一方、両国の政府は歴史葛藤を克服する方法の一つとして、二〇〇二年五月、「韓日歴史共同研究委員会」を設置した。この委員会は、二〇〇五年六月、三年間の研究活動をまとめた膨大な報告書を公開し、任務を終えた。はじめから歴史教育と歴史教科書を研究の対象から外したこの委員会の活動についてはさまざまな批判が寄せられた。その主旨は、この委員会が両国の歴史葛藤を癒すのに何の役割も果たせなかったのではないか、という叱責であった。両国の政府は非難を免れる方法として、メンバーを入れかえてこの委員会を継続することと歴史教育・歴史教科書を研究テーマに含めることなどに合意した。

(3) 歴史対話の広がり

『新しい歴史教科書』の登場は、逆説的に歴史対話を国際的規模へ拡大する効果をも

たらしめた。いままでの対話がおもに「韓日両国型」であったのに対し、最近の対話ではそれ以外にもいろんな国々が加わるようになった。いくつかの例を簡単に紹介すれば次のようである。

韓国と北朝鮮の歴史研究者は平壤などで集まり、日本の歴史教科書における韓国史の取り扱ひ方を議論し、皇国史観的な「歴史歪曲」については共同で強く対処することを明らかにした。言うなれば、「南北共助型の歴史対話」である。二〇〇二年五月に平壤で開かれた「日本の過去清算を要求するアジア地域討論会」、同年八月にソウルで行われた「八・一五民族統一大会」においての独島問題に関する南北学術討論会、二〇〇三年二月に平壤で催された「日帝の強制人力動員の不法性に対する南北共同資料展示会」においての学術大会などがそれである。こうした「南北共助型の歴史対話」は、二〇〇一年三月に平壤、同年六月には金剛山で開かれた「日本の歴史歪曲策動」を糾弾する南北歴史学者の集いを継承したものであった。それゆえ、大会の目的と内容は、日本の「歴史歪曲」に抗議し、また真剣な「歴史清算」を要求するものであった。これから「南北共助型の歴史対話」がどの道を辿るかは、北朝鮮と日本の外交交渉がどんな形をとるかによって大きく左右されるだろう。

次は、韓国・日本・中国の三国、またはこれに北朝鮮・ロシアなどが参加するいわゆ

る「東北アジア型の歴史対話」である。二〇〇二年三月に中国の南京で、二〇〇三年二月に三月に東京で開催された「歴史認識と東アジア平和フォーラム」には、日本の教科書をただす運動本部（韓国）、侵華日軍南京大屠殺遇難同胞記念館・中国社会科学院近代史研究所抗日戦争研究編集部（以上、中国）、歴史認識と東アジア平和フォーラム実行委員会（日本）などが参加した。同年十月には中国のハルビンで「日本帝国主義の東北アジア侵略」についての国際学術会議が開かれ、韓国・北朝鮮・中国・日本・ロシアなどから四〇名の学者が参加した。日本学術会議歴史学研究会連絡委員会歴史研究と教育専門委員会・日本歴史学協会は、二〇〇二年十月、東京で「東アジアにおける歴史教科書の編纂―その歴史と現況」という国際シンポジウムを開催した。その席では、最近韓国・中国・日本において多くの変化が見られる歴史教科書の編纂制度や方法などについて、論議がなされた。

歴史対話の広がりを示すもつとよい例としては、韓国・中国・日本などがヨーロッパやアメリカなどと一緒にシンポジウムを開催したことである。言うなれば、「東北アジア・西洋連合型の歴史対話」である。ドイツ連邦政治教育センター東西コロキウム、ケルン日本文化会館、ドイツ・日本研究所は、二〇〇二年九月にケルンで韓国・日本・ドイツ間の国際シンポジウムを開催した。総合主題は「日本と韓国―共通の未来を目指すため

の課題と展望」であった。こうした新しいタイプのシンポジウムが、ヨーロッパでの歴史対話をリードしてきたドイツで、多くの西洋人が参加した中で開かれたのは、とても意義深いことだった。韓国のユネスコ、アメリカのアジア財団、ドイツのエベルト財団なども、単独あるいは共同で韓国、日本、中国、ヨーロッパ、アメリカなどが参加する国際シンポジウムをソウルと東京で開催した。歴史認識をめぐる対話はもはや韓国と日本の枠を超えてグローバル化しつつあるのである。

#### (4) 歴史対話のなかみ

韓日の歴史対話ではいろいろなことが議論されたが、その中でもやはり両国の歴史教育と歴史教科書が相手の歴史をどう取り扱っているのかを比較検討するのが主流をなした。その場合、歴史的事実の取り扱いが歴史研究の成果に照らして適切かどうかを検証する事が多かった。一九九〇年代半ばまでは日本の歴史教科書の近代史部分が主に話題になったが、それ以後は韓国の教科書を含めて古代から現代までのあらゆる記述が検討の対象になった。各会議では、両国の歴史教育と歴史教科書が、程度の差はあるにしても、国家主義と民族主義に傾いているのではないか、という意見が多く出された。一方、各会議に参加した教師たちは授業の実践を報告し合いながら、生徒が自分の授業を聞い

てから相手国の歴史についてどのような認識の変化を見せるのか、などについて議論した。

一九九〇年代半ば、特に二〇〇〇年以後になると、歴史対話の話題はもつと豊富になり、その内容も建設的な提言が多く含まれるようになる。そのいくつかの例を紹介すれば次のようである。

第一に、韓国の歴史教育と韓国史教科書に対する全面的な批判と対案の模索である。日本の教科書をただす運動本部・歴史問題研究所・全国歴史教師の会・韓国歴史研究会が、二〇〇二年十一月ソウルで開催した「二一世紀における韓国史教科書と歴史教育の方向」というシンポジウムがそれにあたる。このシンポジウムは、韓国の歴史研究者と歴史教育者が日本の「歴史歪曲」を契機に、自らの歴史教育と歴史教科書にも関心を寄せるようになったことを示した。その席では、おもに韓国の歴史教科書の構成と内容がそれぞれ批判の対象になった。また、危機を迎えた世界史教育の正常化方案、歴史教科書編纂制度の改編方向などが論議された。

第二に、日本の「歴史歪曲」の性格を再検討し、それに対する共同対応を試みた。韓国・中国・日本が共同で南京・東京などで開催した「歴史認識と東アジア平和フォーラム」、韓国と北朝鮮が平壤・ソウルなどで開催した学術討論会、韓国・北朝鮮・中国・

日本・ロシアの学者が参加したハルビン学術会議などがそれである。日本の「歴史歪曲」に対して近隣諸国の有志が共同対応のネットワークを作ったことは、一方では歴史対話の成果でありながら、もう一方ではこれからの歴史対話の進め方に大きな影響を与えることにつながる重要な出来事だといえよう。

第三に、歴史対話の一環として、韓国と日本の歴史認識の溝を埋める方法の一つとして、共通で使われるような歴史教材の製作を目論んだことである。その作業グループは幾つもあり、すでに本を出した例もある。『日韓共通歴史教材・朝鮮通信使―豊臣秀吉の朝鮮侵略から友好へ』（日韓共通歴史教材制作チーム）、『日本・中国・韓国Ⅱ共同編集 未来をひらく歴史―東アジア三国の近現代史』（日中韓三国共通歴史教材委員会）などがそれである。ただ、これらの歴史教材は古代から現代までの韓日関係史を網羅したのではなく、一項目あるいは一時期を取り扱ったものである。

全時代の韓日関係史を対象にして共通教材を開発しているグループは私も参加したソウル市立大学の歴史教科書研究会と東京学芸大学の歴史教育研究会である。彼らは一九九七年十二月から二〇〇五年一月まで毎年二回ずつ研究会を開いてきた。この研究会の前半では両国の歴史教科書の記述実態と歴史研究の成果を相互関連させて検討した。そして、後半ではその作業をふまえて共通教材の編纂に取り組み、古代から現代まで約

四〇節の編別構成に従つて原稿を書き、お互いの議論を経て書き直しを繰り返した。参加者は両方おのおの二〇人前後である。二〇〇六年の上期には刊行されるだろう。この本についての評価はともかく、韓日間の歴史認識を巡るかれらの辛抱強い対話の姿勢だけは高く評価してもよいのではないか、と思う。

ちなみに、両国のカトリック教会でも、歴史の対話を重ねてきた。キリストの愛の精神を韓日の歴史認識に生かしてみたい、という試みであった。その主旨にしたがつて、私も執筆に参加して二〇〇四年に『若者に伝えたい韓国の歴史―共同の歴史認識に向けて』が両国で出版された。

#### (5) 歴史対話の論点

歴史対話で議論になった話題は細かい事実の確認から世界史の見方などに至るまで幅広い。そのなかで韓日関係史の把握に関わるいくつかの論点だけを紹介すると以下のようである。

第一に、自国史をどう相対化して把握するか。韓国と日本の歴史教科書は普通自国中心主義が強いといわれる。これをどう克服するかが度々話題になった。

第二に、ナシヨナリズム(民族主義)をどう扱うべきか。これは第一にも関連する問

題である。対話の中で面白かったのは、日本側の人は日本の歴史教科書はナシヨナリズムの色彩がほとんどない反面、韓国の歴史教科書はナシヨナリズムだらけだという。しかし、韓国側の人々は、植民地の経験と南北分断の現実をかかえている韓国の歴史教科書がある程度ナシヨナリズムの傾向を見せるのは止むを得ないが、過度なナシヨナリズムの教育によって国が減じた経験を持っている日本の歴史教科書がまだにナシヨナリズムの虜になっているのは理解し難い、という。結局、両者は国際化・世界化が進むこれからの時代にナシヨナリズムをあおるような歴史教科書はふさわしくない、という点では意見が一致した。

第三に、韓日間で国家の枠を超えた歴史認識、たとえば東北アジアなどの広い枠での歴史認識の設定は可能だろうか。韓日関係史の見方をめぐる激しいやり取りを少し和らげる方法として世界史の中の韓日関係史、あるいは東北アジアの中の韓日関係史を構築すればどうか、という議論もあった。世界史と自国史の教育がはっきり分離されている両国の事情を考慮すれば、その緩衝の歴史舞台として東北アジアを設定するのはいいじゃないか、という意見が多かった。

第四に、日清戦争から第二次世界大戦までの戦争をどのような角度から見見るべきか。日本側はその間の数多い戦争は別々の理由と事情で行われたものだというが、韓国側は

それらを一貫した侵略戦争として捉える。日本側では満州事変以後をせいぜい一五年戦争というが、韓国側は日清戦争以後をひっくるめて五〇年戦争と呼ぶべきだという。これは日本近代史の根本的性格を問う面白い議論だった。

第五に、日本の歴史教科書では第二次世界大戦前に形成された植民地史観的な韓国史認識が完全に払拭されたのか。日本側はこの問いそのものあまり気付かないが、韓国側は日本の歴史教科書にはまだそのニュアンスが残っていると見る。

第六に、韓日の相互理解を増進する歴史教育のあり方は何か。両方は自国史中心主義と偏狭なナショナリズムから脱皮する事が大事だという意見に共感があった。

第七に、韓日共通の歴史教材はつくられるのか。対話の初めの段階では否定的な見方が多かったが、対話が進むにつれて肯定的な考え方に変わった。今は共通の教材を実際に完成したとか、作成の途中にある例がいくつもある。韓日の歴史対話がこのように早く実を結んだのは驚きであり、かつ喜ばしい事である。

#### (6) 相互理解の進展

韓国と日本の歴史対話は歴史研究と歴史教育の両面で相手の事情を理解するのに大きく役に立った。特に歴史研究の新しい動向を把握しながら、歴史的事実を厳密に確認す

る作業は知的好奇心を刺激した。それについての詳しい言及はさておき、ここではとりあえず歴史教育と歴史教科書に関わりのある成果だけを簡単に紹介することにしたい。

第一に、韓日の歴史教育の構造と歴史教科書の実態に関する理解を増進した。歴史対話の初期段階では相手の事情についてあまり知らないし、知っているといつても不正確な場合が多かった。これは歴史対話の速やかな進展と議論の効率的な進行を妨げる要因となった。対話が進むにつれて相互の歴史教育と歴史教科書に関する理解が深まり、議論がもっと活発にまた能率的になった。

第二に、韓日の歴史研究者と歴史教育者、または学生・生徒同士の相互信頼感を形成した。普通、喧嘩は相手の事情を知らない、相手を信じないことから始まる。韓国と日本の歴史葛藤も同じである。度重なる対話によって、参加者同士で互いの立場を理解し、信じ合うようになったことは、これから韓日の歴史葛藤を癒すのに大きな財産になるだろう。

第三に、歴史対話の経過が書籍とマスコミを通じて一般人に知られ、その重要性にある程度の共感を得ることができた。これは両国民の相互理解を深めることに寄与したのに違いない。反面、反発を招いた面もあるだろう。「自由主義史観」とか、「新しい教科書をつくる会」などの動きはその例であるかもしれない。

第四に、韓日関係史に関する教科書叙述の改善に役立った。両国で歴史対話に参加した人の中には教科書の執筆者が含まれている。彼らは対話を通じて相手国の歴史研究の動向と歴史教育の方向を知り、自分なりの立場からそれを自身の教科書執筆に生かした。ほかの執筆者も図書とマスコミを通じて歴史対話で何が議論されているのかに気づき、それを教科書に反映させる場合もあった。

第五に、歴史の共同研究ないし対話のノウハウを蓄積した。韓国と日本の人々が敏感な歴史問題を巡って対話を交わすにはいろいろな配慮が要る。不適切な言動が相手を怒らせ肝心な話までには入ることもできない状況がたびたび起こった。無駄な対立を回避し、生産的な議論に速やかに移るにはやはりノウハウが要る。それを身につけられたのはこれから歴史対話を推し進めていくのに大きな力になるだろう。

第六に、韓日の歴史対話がヨーロッパなどにも知られ、韓国と日本が歴史問題を巡って争いばかりするのではなくて、それを克服するために真剣な取り組みもしているのだという印象を与えた。これは歴史対話がヨーロッパにおいてだけ行われているのではないというメッセージを伝え、両国のイメージを改善するのにも役に立ったと思う。

第七に、韓日間の歴史葛藤を解決するのにひとつの対案を提示する役割を果たした。いままで述べたように、歴史認識を巡って政府同士が直接ぶつかり合うのはひよっとする

と国民感情を刺激しやすい。民間レベルでの歴史対話を通じて相互理解の輪を広げることが大事である。歴史対話を通じて共通教材の開発まで成し遂げたことはこの上ない成果である。このような動きがもつと活発になると、歴史葛藤はすいぶん柔らげられるだろう。

## 5 韓日の歴史対話と歴史認識の深化のために

### (1) 歴史対話の望ましい進み方は？

韓国と日本の二〇年以上にわたる歴史対話の経験を踏まえて、これから両国が歴史葛藤を癒し、お互い理解しあいながら共に生きる未来を拓くためには、どのような歴史対話が必要なのか？歴史対話に参加したい人々が取るべき望ましい姿勢と志について、私なりに感じたいいくつかの意見を述べてみたい。

第一に、お互いに異なる歴史認識を持っている人々同士の対話である事を理解する。人々は普通付き合いが長ければ長いほど言いたいことを自由に話せる間柄になる。歴史対話もそうである。始めから一気に自分が言いたいことだけを主張し、相手の話には耳を傾けないと、その対話は喧嘩で終わる可能性が多い。お互いに違う歴史と文化で生き

た人々との話し合いだという点を前提に、相手の言うことを尊重しながら自分の言いたい事を時間をかけて丁寧に変更する。そうすると共有しうる歴史認識が少しずつでも生まれて来る。

第二に、強い自国中心主義または偏狭なナショナリズムの歴史観を打ち出すことからの脱皮を模索する。韓国と日本のナショナリズムはすでに激しくぶつかりあった経験を持っている。韓国に対する日本の侵略と支配、日本に対する韓国の抵抗と戦いはその典型である。このような歴史的経験のため、韓国と日本の歴史対話ではいまでもナショナリズムが浮き彫りになりやすい。ナショナリズムを学問的に論じ合う事は大切だが、それをぶつけて対話自体が進まないようになると困る。先ず対話の雰囲気を作り、その後慎重にナショナリズムを語り合う事が順序であろう。

第三に、お互いの歴史研究と歴史教育の成果を尊重しながら、それを批判的観点から積極的に活用する。誤解は無知から生まれ、やがて反感へ転ずる場合が多い。歴史対話を通じて知らなかった事が分かるようになると誤解と反感はその分減らす事が出来る。そのためには相手の歴史研究と歴史教育についての学習が必要である。参加者は歴史対話をその機会として有効に活用しようとする姿勢が望ましい。

第四に、始めの段階から歴史認識の共有を目指す対話がかたくなになる。最初はお

互いに議論の的になるテーマについて歴史的事実を徹底的に確認しあうことが重要である。そのような試みの中で歴史知識の共有が生まれる。歴史的事実についての知識の共有は歴史認識の幅を縮める第一歩でありうる。

第五に、歴史対話の多様なありかたについて議論しあい、新しい方法とノウハウを開発する。歴史対話の進め方は参加者の個性、対話の目的などによって異なる事は当然である。したがって、対話の参加者は今までの実績を踏まえながら自分たちに適切な対話の道を開拓していかなければならない。

第六に、歴史対話における誠実性と信頼性を高める。デリケートな歴史問題をめぐって外国人を相手にして話し合うこと自体が非常に疲れる仕事である。その上、対話の準備のために資料を調べ論文を書くのは多くの時間と精力が要る難事である。歴史対話での活動が自らの学問的業績に直接つながらない場合も多い。だからといって、外国人との対話に関わる仕事を適当に怠けるわけには行かない。歴史対話を成功させるためにはむしろ二倍三倍にも誠実に取り組まなければならない。それが相手の信頼を得る王道である。

第七に、歴史対話のチャンネルを拡大し、対話の主題を多様化する。大げさに言えば歴史認識は人の数ほど各人各様であるかも知れない。だから一つの対話が国を代表する

事はありえない。歴史葛藤をやわらげるのにはなるべく多くの人々がいろんな次元でいろんな話題の歴史対話を交わすことがのぞましい。そのような取り組みの中から国民の理解と共感を得られるタイプの歴史対話が自然に現れるだろう。

第八に、歴史対話の進み具合と成果を政府、マスコミ、出版物などを通じて国内外に広く知らせ、国民と外国人に歴史葛藤は克服することができる、というメッセージを与える必要がある。国民は普通歴史問題は自分と関係がないと思いつちである。しかし草の根の付き合いのときにも歴史が話題になる事は多いし、国と国の歴史葛藤も結局国民の世論を反映したものである。したがって、歴史対話のさまざまな経過と成果を政府と国民の歴史認識の形成に積極的に活用することは国同士の無駄な争いを減らすのに役立つ。また世界の人々にも韓日の歴史対話を広く知らせ、両国が話し合いで歴史葛藤を乗り越える事ができるのだ、というイメージを与えることが大事だと思う。歴史対話はヨーロッパだけの専有物ではないのだ。

(2) パートナーシップの形成のための歴史認識を深めよう

歴史認識をめぐる韓国と日本の対話は、単純に過去の仔細な事実に関する解釈をめぐる争うもののみではない。むしろ共に生きる平和な未来を構築するための歴史的基盤

作りの作業である。歴史対話を成功させるためには、まず韓国と日本の密接な歴史関係について改めて再認識する必要がある。両国は二〇〇〇年あまりの間、紆余曲折を経ながらも長く深い関係を結んできた。今日でも両国はヒト・モノ・カネ・情報がもつとも多く往復する間柄である。だからこそむしろ、お互いに誤解・葛藤・不信が多いのかもしれない。両国はこれからも相互の間でいくらか困難な出来事が発生してもいままですらに密接な関係を保ちながら共存していくしかない宿命である。隣国は引越して変えられるものではないからだ。

そうだとすれば、韓国と日本は両国の間に付きまとう歴史の影を取り除く作業に取り組まなければならない。両国の相互理解と友好親善をもう一步推し進めるのにいつも障害になる事がほかならぬ歴史の呪縛だからである。敢えて韓国と日本に限定しなくても、国際化・世界化がさらに進む二一世紀には異文化、異民族、異国家同士の相互理解と友好協力をもっと強く求められる。いわんや韓国と日本においておやである。これから韓国と日本が真のパートナーシップを強めていくことを望んでやまない。また、両国の国民が相互理解と友好親善を志向する歴史認識を持つことを期待する。そのためにはまず歴史教育と歴史教科書がそのような方向へ変わらなければならない。韓国と日本の歴史対話が両国に付きまとう歴史の影を取り除き、真のパートナーシップを強めることに結

び付く事を真に願いたい。

最後に、一言付け加えなければならぬ出来事が起きた。本稿を校正する最中に、小泉首相がついに靖国神社に参拝し、韓国政府がこれに猛反発して年末に予定されている両国の首脳会談さえ取り消されるはめになった、というニュースが飛び込んで来た。私がいままで繰り返し指摘した歴史の呪縛がまた現実として両国を縛るようになったのである。

私はここで両国の政治指導者、特に日本のリーダーたちにいいたい。歴史認識の溝を克服するための韓日の歴史対話を支援しろとは言わないが、せめてそれに水を差すような言動は控えてほしいと。

すでに述べたように、今年は、いろいろな意味で近現代の韓日関係史の中でたいへん重要な節目に当たる。節目には、両国の指導者がそれに相応しい宣言・儀式・行動をとる必要がある。私は二〇〇五年の初めから両国の指導者がどのような言動を披露するのか、密かに期待しながら待っていた。しかし今年ももう終わりに近づくようになってその願いはほぼあきらめることにした。

その代わりに余計な希望ではあるが、両国の首脳に次のような提案をしたい気持ちになった。韓国と日本が一〇〇年の過去を克服し一〇〇年の未来を切り開くために、いわゆ

る「韓日真実和解委員会」または「韓日未来財団」を設ける。ここには両国の政府と民間がともに参加し資金を出し合い、歴史の真実を解明し、その傷を癒し、過去を記念し、若者を育てる、などの事業をする。また、いまの世代の積極的な取組みを次の世代につなげ、過去を忘れないで未来を作る責任を自覚できるようにする。両国の首脳がこの事業を発足させる式典にも出席し、両国民の心の琴線にふれるメッセージを送ればいかにすばらしいことであろうか。

ところが、小泉首相はそれどころか今度また靖国神社に参拝した。むなしい気持ちでいっぱいである。

しかし、それにもかかわらず、われわれは韓日の歴史対話をこれからも続けなければならぬ。それは共生共栄に向けてのオデュッセイアであるからである。

#### 参考文献

比較史・比較歴史教育研究会『自国史と世界史―歴史教育の国際化をもとめて』（未来社、一九八五）

などの一連の書物

日韓相互理解研究会『日韓相互理解アンケート調査集計結果報告書』（一九九二）

日韓歴史教科書研究会『教科書を日韓協力で考える』（大月書店、一九九三）

李元淳『韓国から見た日本の歴史教育』（青木書店、一九九四）

- 中村 哲 『歴史はどう教えられているか』（日本放送出版協会、一九九五）
- 君島和彦 『教科書思想―日本と韓国の近現代史』（すずさわ書店、一九九六）
- 坂井俊樹 『韓国・朝鮮と近現代史教育』（大月書店、一九九七）
- 藤沢法映 『韓国との対話』（大月書店、一九九七）
- 鄭在貞 『韓国の論理―転換期の歴史教育と日本認識』（玄音社、一九九八 ハングル）
- 鄭在貞 『日本の論理―転換期の歴史教育と韓国認識』（玄音社、一九九八 ハングル）
- 鄭在貞 『韓国と日本―歴史教育の思想』（すずさわ書店、一九九八、この日文研フォーラムを若干修正して補章として転載した増補版が二〇〇五年十二月に出された）
- ユネスコ韓国委員会 『二一世紀歴史教育と歴史教科書―韓・日歴史教科書問題解決の新しい代案』（図書出版オルム、一九九八 ハングル）
- 鄭在貞 『歴史教科書問題と韓日協力』（第九次韓・日フォーラム）（二〇〇一・八）
- 鄭在貞 『韓国人の日本認識―その歴史的な進展と課題』（『東北アジア研究 第五号』（東北大学東北アジア研究センター、二〇〇一）
- 石渡延男、鄭在貞共編 『韓国発・日本の歴史教科書への批判と提言』（桐書房、二〇〇一）
- 鄭在貞 『問われる歴史教科書、広がる歴史の対話』（『朝鮮史研究会論文集』四〇、（二〇〇二・一〇）
- 鄭在貞 『韓国的一种（国定）教科書はいま』（『歴史評論』六三二（二〇〇二・一二）
- 鄭在貞 『韓日につきまとう歴史の影とその克服のための努力』（『二一世紀の歴史認識と国際理解』（明石書店、二〇〇四・八）
- 鄭在貞 『広がる対話、深まる議論』（『歴史教科書をめぐる日韓対話』（大月書店、二〇〇四・一一）

## 発表を終えて

日文研フォーラムで「韓日につきまとう歴史の影とその克服のための試み」という題目で発表することはいささか不安であった。折しも、韓国と日本は歴史認識をめぐる年初から激しく対立し、その解決の糸口があまり見られない状況であった。だからこそ、過去20年間日本との歴史対話に取り組んできた私にとってはこの主題を真っ正面から取り上げたかった。幸いに発表は無事終わった。アンケートにあらわれた聴衆の反応もよかったと言われ、ほっとした。私の発表に貴重なコメントをしてくださった日文研の松田先生、司会者としてフォーラムをうまくリードしてくださった牛村先生、発表文と冊子の製作などでお世話になった奥野さんと喜多川さんなどの方々に深く感謝する。

私はいま日文研で、主に戦前の「東アジア鉄道文化の比較研究」に取り組んでいる。その成果の一部として、「朝鮮総督府の鉄道官僚と鉄道政策－大村卓一の場合」と「帝国民のアイデンティティと生き方を求めて－奈良女子高等師範学校生徒の朝鮮・満州旅行（1939）」について発表する機会もいただいた。研究に専念することができる環境を提供してくださった日文研の皆さんに感謝する。これからも研究と対話を通じて韓日の歴史認識の溝を縮めることに努力したい。



日文研フォーラム開催一覧

回	年月日	発表者・テーマ
⑩1	9.11.11 (1997)	<p>KIM Uchang 金 禹昌 (高麗大学校文科大学教授・日文研客員教授) リヴィア・モネ Livia MONNET (モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員)</p> <p>Carl MOSK (ヴィクトリア大学教授・日文研客員教授) ヤン・シニコラ Jan SYKORA (カレル大学助教授・日文研客員助教授) Kinya TSURUTA 鶴田 欣也 (プリティッシュコロンビア大学教授・日文研客員教授)</p> <p>パネルディスカッション 「日本および日本人—外からのまなざし」</p>
⑩2	9.12. 9	<p>ジョナ・サルズ Jonah SALZ (龍谷大学助教授) 「猿から尼まで—狂言役者の修業」</p>
103	10. 1.13 (1998)	<p>KANG Shin-pyo 姜 信杓 (仁済大学校人文社会科学研究所教授・日文研客員教授) 「京都考見録：韓国文化人類学者の経験」</p>
⑩4	10. 2.10	<p>GAO Wenhan 高 文漢 (山東大学教授・日文研客員教授) 「中世禅林の異端者—休宗純とその文学」</p>
105	10. 3. 3	<p>シュテファン・カイザー Stefan KAISER (筑波大学教授) 「和魂漢才、和魂洋才—語彙・表記に見る日本文化の特性」</p>
106	10. 4. 7	<p>スミエ A. ジョーンズ Sumie A. JONES (インディアナ大学教授・日文研客員教授) 「幽霊と妖怪の江戸文学」</p>
107	10. 5.19	<p>リヴィア・モネ Livia MONNET (モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員) 「映画と文学の間に—金井美恵子の小説における映画的身体」</p>
⑩8	10. 6. 9	<p>Hiroshi SHIMAZAKI 島崎 博 (レスブリッジ大学教授・日文研客員教授) 「化粧の文化地理」</p>

⑩	10. 7.14 (1998)	Peipei QIU 丘 培培 (バツサー大学助教授・日文研来訪研究員) 「なぜ荘子の胡蝶は俳諧の世界に飛ぶのか —詩的イメージとしての典故—」
110	10. 9. 8	ブルーノ・リーネル Bruno RHYNER (チューリッヒ大学講師・ユング派精神分析家・日文研客員助教授) 「日本の教育がかかえる問題点」
⑪	10.10. 6	アハマド・ムハマド・ファトヒ・モスタファ Ahmed M. F. MOSTAFA (カイロ大学講師・日文研客員助教授) 「『愛玩』—安岡章太郎の『戦後』のはじまり」
⑫	10.11.10	アリソン・トキタ Alison McQUEEN-TOKITA (モナシュ大学助教授・日文研客員助教授) 「『道行き』と日本文化—芸能を中心に」
113	10.12. 8	グレン・フック Glenn HOOK (シェフィールド大学教授・東京大学客員教授) 「地域主義の台頭と東アジアにおける日本の役割」
⑬	11. 1.12 (1999)	Du Qin 杜 勤 (華東師範大学助教授・華東師範大学外国語学院 第2学部副学部長・日文研客員助教授) 「『中』のシンボリズムについて—宇宙論からのアプローチ」
115	11. 2. 9	シーラ・スミス Sheila SMITH (ボストン大学助教授・日文研客員助教授) 「日本の民主主義—沖縄からの挑戦」
⑭	11. 3.16	エドウィン A. クランストン Edwin A. CRANSTON (ハーバード大学教授・日文研客員教授) 「うたの色々：翻訳は詩歌の詩化または死化？」
⑮	11. 4.13	ウィリアム J. タイラー William J. TYLER (オハイオ州立大学助教授・日文研客員助教授) 「石川淳著『黄金傳説』その他の翻訳について」
⑯	11. 5.11	KIM Ji Kyun 金 知見 (韓国・仏教教育大学大学院長・日文研客員教授) 「内藤湖南先生の眞蹟—高麗太祖頭陵詩」

119	11. 6. 8 (1999)	<small>マリア・ヴエイヴォディッチ</small> Marija VOJVODIC (モンテネグロ共和国政府民営化推進部外資担当課長・ 日文研客員助教授) 「言葉いろいろ—日本の言葉に反映された文化の特徴」
⑫⑩	11. 7.13	<small>REECE Sachiko Taki</small> リース・幸子 滝 (米国・ケドレン精神衛生センター箱庭療法トレーニングコン サルタント・日文研客員助教授) 「心理臨床の場に映った私生活の中の暴力と社会の中の暴力」
⑫⑪	11. 9. 7	<small>SONG Min</small> 宋 敏 (韓国・国民大学校文化大学学長・日文研客員教授) 「明治初期における朝鮮修信使の日本見聞」
⑫⑫	11.10.12	<small>ジャン・ノエル・A. ロベール</small> Jean-Noël A. ROBERT (フランス・パリ国立高等研究院教授・日文研客員教授) 「二十一世紀の漢文—死語の将来—」
⑫⑬	11.11.16	<small>ヴラディスラフ・ニカノロヴィッチ・ゴレグリアード</small> Vladislav Nikanorovich GOREGLIAD (ロシア科学アカデミー東洋学研究所サントペテルブルク 支部極東部長・日文研客員教授) 「鎖国時代のロシアにおける日本水夫たち」
⑫⑭	11.12.14	<small>X. Jie YANG</small> 楊 曉捷 (カルガリー大学準教授・日文研客員助教授) 「鬼のいる光景—絵巻『長谷雄草紙』を読む—」
⑫⑮	12. 1.11 (2000)	<small>エミリア・ガデレワ</small> Emilia GADELEVA (日文研中核的研究機関研究員) 「年末・年始の聖なる夜 —西欧と日本の年末・年始の行事の比較的研究」
⑫⑯	12. 2. 8	<small>LEE Eung Soo</small> 李 応寿 (世宗大学校副教授・日文研客員助教授) 「東アジア獅子舞の系譜—五色獅子を中心に—」
127	12. 3.14	<small>アンナ・マリア・トレンンハルト</small> Anna Maria THRÄNHARDT (デュッセルドルフ大学教授・日文研客員教授) 「皇室と日本赤十字社の始まり」
⑫⑰	12. 4.11	<small>ペッカ・コルホネン</small> Pekka KORHONEN (ユワスクラ大学教授・日文研客員助教授) 「アジアの西の境」

⑫⑨	12. 5. 9 (2000)	KIM Jeong Rye 金 貞禮 (国立全南大学校副教授・日文研客員助教授) 「五・七・五、日本と韓国」
⑬⑩	12. 6. 13	ケネス L. リチャード Kenneth L. RICHARD (県立長崎シーボルト大学教授・日文研客員教授) 「出島—長崎—日本—世界 憧憬の旅 サダキチ・ハルトマン (1867—1944) と倉場富三郎 (1871—1945)」
131	12. 7. 11	リュドミラ・ホロドヴィッチ Lyudmila HOLODOVICH (ソフィア大学助教授・日文研客員助教授) 「お盆と正教の五旬祭—比較的なアプローチ—」
⑬⑫	12. 9. 12	マーク・メリ Mark MELI (日文研外来研究員) 「『物のあはれ』とは何なのか」
133	12.10.10	リチャード・ルビンジャー Richard RUBINGER (インディアナ大学教授・日文研客員教授) 「読み書きできなかつたのは誰か—明治の日本」
⑬⑭	12.11.14	SHIN Yong-tae 辛 容泰 (東国大学校日本学研究所研究員・日文研客員教授) 「日本語の『カゲ(光・蔭)』外—日本文化のルーツを探る—」
135	12.12.12	CAI Dun da 蔡 敦達 (同済大学日本学研究所助教授・日文研客員助教授) 「中国文人が観た明治日本—旅行記を読む—」
⑬⑮	13. 2. 6 (2001)	バルト・ガーンズ Bart GAENS (日文研中核的研究機関研究員) 「長者の山—近世的経営の日欧比較—」
137	13. 3. 6	ポール・S. グローナー Paul S. GRONER (ヴァージニア大学教授・日文研客員教授) 「仏教の戒律とは何か？」
⑬⑯	13. 4. 10	L1 Zhuo 李 卓 (南開大学教授・日文研客員教授) 「中日姓名の比較について—親族の血縁性と社会性—」
⑬⑰	13. 5. 8	エッケハルト・マイ Ekkehard MAY (フランクフルト大学教授・日文研客員教授) 「西洋における俳句の新しい受容へ」

⑭④	13. 6.12 (2001)	XU Subin 徐 蘇斌 (日文研外国人研究員) 「中国現代建築の成立基盤—留日建築家・趙冬日と人民大会堂—」
141	13. 7.10	ヘンリー D. スミス Henry D. SMITH, II (コロンビア大学教授 日文研外国人研究員) 「忠臣蔵再考—四十七士の三百年—」
⑭⑤	13. 9.18	ジョナサン M. オーガステイン Jonathan M. AUGUSTINE (日文研外来研究員) 「聖人伝、高僧伝と社会事業—古代日本、ヨーロッパの高僧を中心に—」
143	13.10. 9	アレクサンダー・ボビン Alexander VOVIN (ハワイ大学準教授・日文研客員助教授) 「日韓上代言語域：神と国と人と」
144	13.11.13	GUAN Wen Na 官 文娜 (日文研外国人研究員) 「日本社会における『近親婚』と中国の『同姓不婚』との比較」
145	13.12.11	チグサ キム ラステイーブン Chigusa KIMURA-STEVEN (ニュージーランド・カンタベリー大学準教授・日文研外国人研究員) 「大庭みな子『三匹の蟹』：ミニスカート文化の中の女と男」
⑭⑥	14. 1.15 (2002)	SHIN Chang Ho 申 昌浩 (日文研中核的研究機関研究員) 「親日仏教と韓国社会」
⑭⑦	14. 2.12	マシミリアーノ ト マシ Massimiliano TOMASI (ウェスタン ワシントン大学準教授・日文研外国人研究員) 「近代詩における擬声語について」
148	14. 3.12	JEONG Hye Kyeong 鄭 惠卿 (世宗大学校人文科学大学副教授・日文研外国人研究員) 「日韓言語文化の比較—語る文化と語らぬ文化—」
149	14. 4. 9	マッシュュー フィリップ マッケルウェイ Matthew Philip McKELWAY (ニューヨーク大学助教授・日文研外国人研究員) 「初期洛中洛外図の人脈と武家作法—三条本を中心に—」

⑬⑩	14. 5.14 (2002)	LEE Kwang Joon 李 光濬 (東西心理学研究所所長・日文研外国人研究員) 「禅心理学的生命観」
⑬⑪	14. 6.11	LU Yi 魯 義 (中国・北京外国問題研究会教授・日文研外国人研究員) 「中日関係と相互理解」
152	14. 7. 9	アレクシア ボロ Alexia BORO (イタリア カ・フォスカリ大学助手・日文研外国人研究員) 「建物と権力—明治初期の東京の建築について」
⑬⑫	14. 9.10	YEE Mili m 李 美林 (日文研外国人研究員) 「近世後期『美人風俗図』の絵画的特徴—日韓比較—」
154	14.10. 8	マルクス リュッターマン Markus RÜTTERMANN (日文研外国人研究員) 「伝授から伝統へ—中・近世日本における『啓蒙』の一面について」
⑬⑬	14.11. 5	KIM Moon Gil 金 文吉 (韓国・釜山外国語大学校教授・日文研外国人研究員) 「神代文字と日本キリスト教—国学運動と国字改良」
156	14.12.10	スーザン L. バーンズ Susan L. BURNS (米・シカゴ大学準教授・日文研外国人研究員) 「問題化された身体—明治時代における医学と文化」
157	15. 1.14 (2003)	デビッド L. ハウエル David L. HOWELL (米・プリンストン大学準教授・日文研外国人研究員) 「天保七年常州那珂湊敵討ち一件顛末」
158	15. 2.18	Zhan Xiaomei 戦 暁梅 (日文研研究機関研究員) 「隠逸山水に秘められた『近代』—富岡鉄斎を読む—」
159	15. 3.11	リチャード H. オカダ Richard H. OKADA (米・プリンストン大学準教授・日文研外国人研究員) 「『母国語』とは誰の言葉? : 言語と国民国家」

①60	15. 4. 8 (2003)	ビル スウェル Bill SEWELL (カナダ・セントメアリー大学助教授・日文研外国人研究員) 「旧満州における戦前日本の町づくり活動」
161	15. 5.20	Park JeonYull 朴 銓烈 (韓国中央大学校教授・日文研外国人研究員) 「神々の使者に扮装する愉しみ—門付け儀礼の演劇性をめぐって—」
162	15. 6.10	RHEEM YongTack 林 容澤 (韓国・仁荷大学校副教授・日文研外国人研究員) 「詩の翻訳は可能か—金素雲訳『朝鮮詩集』の場合—」
163	15. 7. 8	ボイカ エリト ツイゴバ Boyka Elit TSIGOVA (ブルガリア・ソフィア大学準教授・日文研外国人研究員) 「ブルガリア人の日本文化観—その理解と日本文芸作品の翻訳をめぐって—」
164	15. 9. 9	インゲ マリア ダニエルズ Inge Maria DANIELS (ロイヤル・カレッジ・オブ・アート客員講師・日文研外来研究員) 「現代住宅に見られる日本人と『モノ』の関わり方」
①65	15.10.14	WANG Cheng 王 成 (首都師範大学助教授・日文研外国人研究員) 「阿部知二が描いた“北京”」
①66	15.11.11	CHEN Hui 陳 暉 (中国社会科学院亜太日本研究所研究員教授・日文研外国人研究員) 「明治教育家 成瀬仁蔵のアジアへの影響—家族改革をめぐって—」
167	15.12. 9	エフゲニー S. バクシエーフ Evgeny S. BAKSHEEV (国立ロシア文化研究所研究員・日文研外国人研究員) 「人と神とが出会う場所 沖縄県宮古諸島の聖地・拝所—その構造と形態を中心として—」
168	16. 4.13 (2004)	MEN Joosik 閔 周植 (韓国・嶺南大学校教授・日文研外国人研究員) 「風流の東アジア—美を生きる技法—」
①69	16. 5.11	コンスタンティン ノミコス ヴァポリス Constantine Nomikos VAPORIS (米国・メリーランド大学準教授・日文研外国人研究員) 「参勤交代と日本の文化」

⑩⑦	16. 6. 8 (2004)	WANG Shukun 王 述坤 (中国・東南大学教授・日文研外国人研究員) 「近代における日本、中国の文人・作家の自殺」
⑩⑧	16. 7.13	ヴィクター ヴィクトロヴィッチ リビン Victor Victorovich RYBIN (ロシア・サンクトペテルブルグ大学助教授・日文研外国人研究員) 「知られざる歌麿—『百千鳥狂歌合はせ』の詩的、文法的分析」
172	16. 9.14	スコット ノース Scott NORTH (大阪大学大学院人間科学研究科助教授) 「セールスマンの死 : サービス残業・湾岸戦争・過労死」
173	16.10.19	SE Yin 色 音 (中国社会科学院民族研究所研究員 教授・日文研外国人研究員) 「シャーマニズムから見た〈日本的なるもの〉」
174	16.11. 9	LEE HanSop 李 漢燮 (韓国 高麗大学校日語日文学科教授・日文研外国人研究員) 「明治期の外国人留学生と文明開化」
175	16.12.14	アレクサンダー マーシャル ヴァーシー Alexander Marshall VESEY (米国 ストーンヒル大学助教授・日文研外国人研究員) 「近世村社会における仏教僧侶の村人との仲介役割の役割」
176	17. 1.11 (2005)	ロイ アンソニー スターズ Roy Anthony STARRS (ニュージーランド オタゴ大学シニア・レクチャーラー・日文研外国人研究員) 「国家主義者としての三島由紀夫—戦後の原点」
⑩⑨	17. 2. 8	マッツ アーネ カールソン Mats Arne KARLSSON (ストックホルム大学助教授・日文研外国人研究員) 「僕はこの暗合を無気味に思ひ... 芥川龍之介『齒車』、ストリンドベリ、そして狂気」
⑩⑩	17. 3. 8	WU Yongmei 呉 咏梅 (北京日本学研究中心専任講師・日文研外国人研究員) 「アジアにおけるメディア文化の交通—中国人大学生が見た日本のテレビドラマめぐって—」
⑩⑪	17. 4.12	ノエル ジョン ピニンガトン Noel John PINNINGTON (アリゾナ大学助教授・日文研外国人研究員) 「中世能楽論における『道』の概念—能役者が歩むべき『道』」

180	17. 5.10 (2005)	CHI Myong Kwan 池 明観 (日文研外国人研究員) 「韓国現代史と日本について—1973年から1988年まで—」
181	17. 6.14	イアン ジェームズ マク マレン Ian James MCMULLEN (オックスフォード大学ペンブロークカレッジ教授・日文研外国人研究員) 「徳川時代の孔子祭」
⑩	17. 7.12	CHUNG Jae Jeong 鄭 在貞 (ソウル市立大学校教授・日文研外国人研究員) 「韓日につきまとう歴史の影とその克服のための試み」
183	17. 9.20	オギュスタン ベル ク Augustin BERQUE (日文研 外国人研究員) 「日本の住まいにおける風土性と持続性フランス国立社会科学高等研究院教授」
184	17.10.11	NO Sung Hwan 魯 成煥 「韓国から見た日本のお盆」 (蔚山大学校人文大学日本語日本学科教授・日文研究外来研究員)
185	17.11.16	セルゲイ ラブチェフ Sergey LAPTEV (マクシム・ゴリキー文学学院助教授・日文研外国人研究員) 「考古学と文字—古代日本の漢字文化を中心に」
186	17.12.20	YOUN Sang In 尹 相仁 (漢陽大学校国際文化大学日本語文化学科教授・日文研外国人研究員) 「〈日流〉の水脈—なぜ韓国の若者は日本の現代小説に惹かれるのか」
187	18. 1.10	アンドリュウ ガーストル Andrew GERSTLE (日文研外国人研究員) 「女形の身体を描く—肉体表現と流光斎—ロンドン大学 SOAS 教授」

○は報告書既刊

なお、報告書の全文をホームページで見ることが出来ます。

<http://www.nichibun.ac.jp/dbase/forum.htm>



\*\*\*\*\*

発行日 2006年1月20日  
編集発行 国際日本文化研究センター  
京都市西京区御陵大枝山町3-2  
電話 (075)335-2048  
ホームページ：http://www.nichibun.ac.jp

\*\*\*\*\*

©2006 国際日本文化研究センター





■ 日時

2005年7月12日（火）

午後2時～4時

■ 会場

キャンパスプラザ京都

